

## 《奄美をモチーフにした映画「根の国」づくりに協力を！》

映画作品のクオリティはその芸術性にある。如何に見る人を感動させるか、そのためにはプロフェッショナルな技術と製作者の思想、哲学が当然とは云え不可欠である。奄美の雄大で神秘的に育まれた自然を背景に、シマ唄を、六調、八月踊りをドキュメントする事、何よりも両親の故郷の映像作品を奄美大島ゆかりの皆さんと共に製作したいと熱く語るのは、母が龍郷、父が名瀬出身の映画監督、プロデューサーの藤山顕一郎さん(69歳)とその企画を担当する近畿大学文芸学部教授の清(きよし)真人さん(祖父母が瀬戸内町出身)。

龍郷町出身の歴史研究家で作家の配山実さんの紹介で兩人から話を伺った。

“奄美群島を世界自然遺産へ”の運動が始まっている中で、この奄美の自然文化遺産を総合的に表現し世界の人々に知ってもらいたいとの思いから映画化を企画しているとのことだ。

藤山監督は、18年間東映京都撮影所に在籍、「仁義なき闘い」シリーズ、「鎌田行進曲」、「柳生一族の陰謀」なお、深作欣二監督の助監督として17本の作品に参加、1988年から足掛け10年間米国ハリウッドにて、プロデューサーを歴任後帰国、ドキュメンタリー映画「We命尽きるまで」「みなまた海のこえ」他を監督。

一方の清教授は、奄美に関する著書「奄美八月踊り唄の宇宙」「根の国(ニライカナイ)」「唄者 竹下和平のシマ唄語り」「サルトルの誕生」など、他哲学書など多数の著書がある。

話を聞くと、琉球一島津藩の支配下、、平家の落人～隔離されたシマ社会、万葉文化、シマロ、ノロ、、遺存固有種、独特な食文化、、等々、興味深い話が続々。殆ど映画を観ない私ですら、どんな映画が出来上がるのか、ワクワクするような感動を覚えた。

企画書の一部を拝見すると、伝統的なシマ唄と若者たちの新しいシマ唄がコラボするドキュメンタリーを下敷きにして、年輩の唄者の少年時代の風景とオーバラップする加計呂麻レゲエをはじめ(中略)、、今に生きる奄美の若者たちと伝統を継承するベテラン唄者が織り成す人間ドラマを描いた劇映画にすることで、より高い芸術性を持ちながらエンターテイメントとして世界の名だたる映画祭の表舞台に上ることを目指そうというものだ。

口承文化として今を生きているシマ唄を映像詩として世に問うことは必然であり、「今を生きている」文化だからこそドキュメンタリー化が可能であり、世界に発信し、かつ後世に残すべきである。

※日本古来の歴史・文化を伝承し、沖縄のそれとは明らかに違った自然と文化を今に伝えている奄美をモチーフとした映画の製作、ぜひ実現してほしい。

映画化するには、それ相当の資金が必要であり、島内外の奄美出身者の協力をぜひともお願いしたいと思います。